

## ACT03

# トリロジー・オブ・ハートレス・キラーズ

## 1 ロシアン・ルーレット

その女は突然、バーに現れた。寒い夜だった。吐く息が白く凍り付きそうな、とても寒い夜。オールドハイトは霧の街。白く漂う空気がまとわりつき、女の肌にへばりつく。

酒が欲しい。喉を焼き切るような、強い酒が。

「ウォートカをくれ」

ロシア訛りの英語。水滴を帯びたグレイの髪。黒いマフラー、フライトジャケット。女の目元はティアドロップのサングラスで覆われており、うかがい知れない。右手には使い込まれた白杖が握られており、彼女の目が見えない事がわかる。

細い女だ。ふらついている。高い鼻筋のまわりだけ赤みが差している。酔っている。二軒目なのか。バー「グッド・スモッグ」の年食ったバーテンが思ったのはそんな程度のことだった。

「瓶ごと」

「おいおい、どこで飲んできやがった」

「私は、客。ここ、酒屋。瓶ごと」

女はただどしどしい英語で、カウンターを指でこつこつ叩く。重低音のロックサウンドにも負けぬ、美しい声なのだろう。酒にさえ焼けていなければ。

「ふらついてる。強い酒飲まれてゲロって掃除する身にもなつて欲しいね」

「ウォートカ」

「分かったよ。好きに飲んでろ」

バーテンが乱雑に置いたか置かないかぐらいで、女は瓶を奪い取った。見えているのか、いないのか分からない。そもそもここは地下だ。細く狭い階段を降りなければならぬ。初めて見る客が、頭やらなにやらぶつけずに降りただけでも、賞賛に値するというものだ。

「ありがとう」

女は瓶を開けると、なんとそのまま口をつけてラッパ飲みし始める。さびれたバーでも、数人は客がたむろっている。そこから口笛やおろすような声。女はそれを半分ほど飲み干した後、酒臭い息を吐いた。

「……バーテン。私、探している、人を」

「人を？」

「そう。イーストサイドの、ウェルズ。ミッキー・ウエ

ルズ」

バーテンはちらりと奥に座っている数少ない客を見た。突然自分の名前を呼ばれて驚く、哀れなミッキー・ウエルズとその仲間達を。最近の彼らの羽振りが良い。噂によれば、どこかの金持ちの家に強盗に入ったのではないのかという根つからの噂だ。

噂。バーには噂が集う。同じだけ、危険も集う。女はどちらだろう。噂をたどりに来たのか。噂を殺しに来たのか。

「俺になにか用か？ ロシアの姉ちゃん」

先に仕掛けたのはミッキーだった。ヤバイ野郎だ。イーストサイドで積極的に仲良くなるうというやつはいない。甘いマスクで女受けが良い不良だが、十三歳で二人撃ち殺したと、根つからの噂だ。

「あなたですか、ミッキー」

「ああ、俺がミッキー・ウエルズだ」

ミッキーは不意に、女のサングラスを取った。女の瞳は、熱を通した魚卵みたいに白かった。失明している。

「目が見えないのか？」

「見えない。全く、昔の頃から」

「そうかい、ベイビー。……なかなかイケてる」

ミッキーと一緒に飲んでいた三人の仲間にアピールするように言った。そしてなれなれしく女の腰に手を回す。

「どうだい、ベイビー。ここじゃムードに欠ける。どうか、静かなところで飲みなおさねえか」

女はしばらく押し黙っていたが、やがて口角を上げて言った。

「返してくれたら、サングラス」

「ああ、悪かったなベイビー。見とれていたのさ」

ミッキーから受け取ったサングラスを、女は触つて確認すると、たどたどしく顔にかけた。そして、即座にウオッカの瓶を取り、残りの酒を飲み干す。女の身体がぶると震える。

「静かなところ」

「ああ、もちろんさ」

ミッキーは下卑た笑みを浮かべた。一晚遊んでやろう。連れと一緒に遊んでもいいが、ロシア女を抱くのは初めてだ。どう料理してやろうか——そんなことを考えていたミッキーは、見下ろしていた女が、白杖を握るところを見ていた。女が白杖を捻じると、キャップが抜けるよ

うに白杖の持ち手が取れ、中から長い針が抜きだされた。

次の瞬間には、ミッキーの脇腹にその針が突き刺さっていた。女以外に誰も、何が起こったのか分からなかった。

ミッキーがうめき声をあげても、彼の友達にも何が起こったのかはまだ分かっていなかった。女はまるで見えるかのようにすつくと立ち上がり、フライトジャケットをめぐり、肩に吊ったホルスターから、古臭いリボルバー——ナガンM1895を抜く。7・62ミリナガン弾を四つ、ポケットから取り出すと、ローディング・ゲートを開き、時でも止めたようにゆつくりとした動きで押入れると、ぴたりと頭に照星を合わせた。

そこでミッキーの友人たちは、ミッキーや自分たちに何が起こっているのか分かった。今ミッキーは腹を刺された。女がやった。女は銃を抜き、弾を装填した。まるでみせつけるように、ゆつくりと。

そうだ。女は、自分たちを殺しに来た。

「たすけてく」

銃声。銃声。銃声。友達は脳漿と血をまき散らして全員死んだ。血のにじむ脇腹を抱えて、ミッキーはそれを見つめて見ていた。助けを求めようとバーテンのい

た方向を見たが、すでに姿はなかった。殺される。神様。畜生。

「ロシアにはある。こういうことわざが。『猫にいつまでもカーニバルが続くとは限らない、太齋もまたやつてくる』。分かる？」

きりきりきり、と軽やかにシリンダーを回転させた。お世辞にも美しいとは言えぬが、バーの情緒あるランプがその銃を輝かせているように見えた。

「カーニバルか？ 太ベリキー・ポスト齋か？ 分かる？ あなた？」

女はシリンダーを止めて、銃口を自らのこめかみに向け、躊躇なく引き金を引いた。弾は出なかった。ミッキーは自分の事のようにほっとした。狂気は終わったのだ。そう勘違いした。

その通り、勘違いだったのだ。

「残念」

「ベイビー、ベイビー、やめてくれよ、お願いだ。俺が何を……」

ミッキーは明らかな死の香りから逃げたい一心で、あえぐように言った。その言葉に意味はなかった。身にな

らぬ行為だった。

「私、お金好き。お金奪いました、あなたたち。だから、あなたたちのお金もらう。オーケイ？」

「金……金なんかもう、ねえ！ 使っちゃったんだ。本当さ、ベイビー！」

女はその言葉にショックを受けたのか、ぐらりと頭を抱えてたたらを踏んだ。実際は違う。酒が切れた。酒は女とつての光だった。酒が切れば、光は失われる。女は病で光を失ったあと、そう作り直されたのだ。

片目だけ見えればいい。酒で酔っていても、引き金を引ければ銃は使える。酒で酔った時だけ見える片目が、彼女に与えられた餞別だった。その目で、殺すべきものを殺す。女は——ヴィイガはそうやって生きてきた。祖国を追われたその日から、そうやって、ずっと。

「カーニバルか、太齋か」

ヴィイガはシリンダーを再び回転させた。ナガンのシリンダーには七発の弾が入る。入っているのは一発。ヴィイガは再び暗闇に落ちた視界に舌打つと、ミッキーの顔に手を這わせる。口に指を突っ込んで確認すると——今度はバレルを啞えさせた。

「見えなくても、これなら外さない……」

ヴィガは引き金を引いた。高らかに銃声。まき散らされる血。ドアベル。バーテンの気配は既に無かった。逃げていようがいまいが、ヴィガには関係がない。彼女には酒と金、そしてこのナガン・リボルバーしか残されていないのだから。

カーニバルか、太齋か。

ヴィガは祖国を追われた日から、太齋が来る日を待っている。

## 2 詮索不要の闇商売

はじめは些細な出来事だった。縄張り争いで敵対するギヤング『ノースサイド・デビルズ』との関係が悪化して、本格的に抗争に入ることになった日——キンググッブツグボデイ“ニコルズを痛めつける算段を打ち、先制ジヤブを入れ終わった日に、兄弟のキツデイが通りを歩いている時、妙なアジア人とトラブルになったのが始まりだった。

肩がぶつかったとか、そんな程度のことだった。キツデイは筋金入りのギヤングだったし、ナメられるという行為そのものをとにかく嫌った。それこそ、プライドのためなら女でもママでもぶん殴るだろう。

そんな奴だったから、アジア人の——どう見たってキツデイの体格のふた周りほ小さい——男を許さなかった。袋叩きにして八つ裂きにするまではするだろう、というのが周囲の予想だった。

数人の取り巻きが当然のようにいたキツデイが、そいつをどのように料理しようとしたのかはわからない。サウランド・サンダースはビビらせるためとメンツのた

めならいくらでも残酷になれるのは確かだ。

だから、キッデイを含めた五人が、男を連れ込んだ裏路地でずたずたに切り裂かれて全員ブチ殺されているなんて、誰も考えなかった。そんな生臭い事件が、三回も連続するとは、誰も。

「ぜってえ変だぜ」

大麻が大好きな脳みそトロケ野郎の癖に、JJの指摘は的確だった。

「もう七人目だろ。キッデイの他に、古株のイラクまで殺られちまったんだぜ。なあ、ブラザー。さすがにやべえ」

おれはJJの家でビア・ザ・スター——ビール。最低の味だ！——を流し込みながら、やつがクサをキメてるみたいに思考をプカプカ浮かばせていた。ブラザー達の葬式だけが連続していた。墓の下も随分賑やかになったことだろう。

JJの家は夜になると静かだ。回りが廃ビルと工場に囲まれたクソみたいな立地だからだが、サンダースとしては逆に便利な面が多い。ヤクはもちろん、銃器や女を隠したり、デビルのクソどもをボコつたりするにはう

つてつけだ。

だから、大抵何か話し合ったりするときには、メンバーはここに集まる。

「いつものメンバーもずいぶん少なくなっちゃったぜ、フィフス。ボスのあんたにや、いい加減腰あげてもらわねえと、みんなに示しがつかねえ」

宝物だというロザリオを拳に握り締めながら、チャーチが静かに言った。俺、JJ、チャーチ。それに何名かのメンバーが集まったが、明らかに少ない。正直なところデビルスとの抗争は失敗だった。ギャングなんてのはメンツの次にカネと女が優先される生き物だ。たしかにそういうものは大事だが、そのために命を落とそうというのはおかしい話だ。

どこかでケリをつけねばならないだろう。今回の事はデビルスの差金に違いない。

だからこそ、手は打った。デビルスの大幹部であるビッグボディの身柄を抑え、あの女——鉄腕アイアンナゲルに依頼をかけたのだ。

殺す手前までいたためつけろ。タマ蹴り上げてやれ。サウスパークはオールドハイト一の危険地帯だ。そん

な中で、ギャングとして生き残るのは並大抵のことではない。  
ない。

つつかかれば死を意味するレベルの危険人物なら掃いて捨てるほどいるが、その中でも鉄腕は別格だ。

中にはヤツを女だから犯そうなどと考えたアホの集まりもいたらしいが、全員竿の根っこから引っこ抜かれてブツ殺されたとの根っからの噂だ。そんなやつと隣人なのだから、慎重にこしたことはない。

地元に住んでるんだから、逆らわないのがいいに決まっている。サンダースのメンバーにも、それを徹底している。だから、俺たちのような連中の依頼にも、彼女は金さえ払えば応じてくれるというわけだ。

お互いへのリスベクトこそが、生き残るためのコツだ。「ビッグボディの野郎は明日にも泣きついてくるさ。手は打ってんだ。同じ心配なら、キツディのシマの管理をどうするかだろ。アイツのやつてたクラブは、趣味丸出しだからな……」

不意に廊下の奥を見た。ノーランの瞳がこちらを覗いていた。問題は角度だった。やつはプロレスラーみたいな体格で、俺より背が高いはずなのに、床に寝転がって

こちらを見ていた。意味がわからない。さつきまで廊下見張ってたろ、お前。

「ノーラン、お前何寝てんだ？」

JJは後輩の態度が気に入らなかつたのか、呂律が怪しいまま、ゆつくりとキレていた。

「ファッキン会議中だつてのに！」

廊下の外を見ようとしたJJが、なぜかそこで立ち止まった瞬間、やつの背中から、鈍く光る何かが生えた。

それは包丁や、ナイフに似ていた。

刃は血の水玉をあしらいつつながら伸びて、一気に引つ込み、JJはその場に崩れ落ちた。

そこに、今までいなかったはずの男が現れた。

おさまりの悪い黒髪。濃い隈が目元にこびりつき、口元には紫色のマフラー。血染めの黒いジャケットに、黒いジーンズ。

「誰だ、テメェ！」

俺とチャーチが銃を抜いたが、運悪く男の近くに立っていた彼は、銃を握つたままの右手を斬り飛ばされた。

チャーチは何か声を出そうとしていたが、今度は別の刃で喉を切り裂かれ、ブサイクな赤いスプリンクラーと

化し、口をしばらくぱくぱく動かしていた。それもやがてなくなつた。

死んだのだ。

サウスランド・サンダースの誇る、幹部たちが全て。

「誰だテメエ！ 誰に雇われた！」

男は両手にサムライ・ソードを握つたままだったが、器用にそのまま頭をかいた。とてもつい先程人を殺したようには思えない。顔の返り血がそのままになつているのがまた、奇妙だつた。

「それ、おたくに言わなくちゃいけませんかね？」

「るせエーッ！ よくも兄弟<sup>ブラザー</sup>を！ 言えよ！ その後ブツ殺す！ テメエの脳みそぶち撒けてやる！」

銃口がカチカチ音を鳴らしているのが、なんとも情けなかつた。男はつまらなそうにため息をついた。

「んじや言いますがね。あんたらみたいになクズが街をウロウロしてると困るつて言うんですよ。それが依頼人です。僕はそれを遂行する殺し屋。名前はドモンつてもんです。……答えになりましたかね？」

「なつてねえよ！ 殺す！ テメエ、ブツ殺す！」

俺はトリガーを引いた。マズルフラッシュと共に弾丸

が男を貫いた——はずだつた。男は右手の刃をバレルにぶつけ、射線を強引にズラしたのだ。虚しく壁に貼つたGG8のポスターの眉間に穴が開く。

そして、いつの間にか自分の鎖骨あたりに、男の——ドモンの左手に握られた刃が飲み込まれていく。押し込まれていく！

出したことのない苦悶の聲が、自分の喉から漏れ出す。血が溢れ出し、自分が消えそうになる。

こんなはずではなかつたのに。

血を伴つて、刃が抜かれる。命と共に血が吹き出す。

炭酸の抜けたコーラみたいな黒い瞳が、俺を見下ろしていた。

「ああ、先に言つときますけど——懺悔の言葉なら聞きませんよ。どうせ天国なんかいけませんからね。僕も、あんたも」

ドモンは両手に握つたサムライ・ソードを振つて、血のしずくを飛ばしてから、ベルトに帯びた鞆に納めた。

虚しい仕事だつた。しかし、それが彼の仕事だつたし、

唯一得意としていたことだつた。